

---

Good bye days ~ **それでも僕たちは生きていく** ~

遠野簾助

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Good bye days（それでも僕たちは生きていく）

### 【Nコード】

N2540BA

### 【作者名】

遠野簾助

### 【あらすじ】

高度な文明が発展した都市エルリアに起こる原因不明の事件の数々。それを解決するために学園ヴァレイに設置されたクラスS。突如クラスSに振り分けられた水城テツペイとその仲間たちを待ち受けるものとは？数奇な運命に手繰り寄せられた者たちの戦いの物語が始まる

## prologue?

そこは戦場だった。

荒れ果てた大地が渴いた風の音が無数の骸がその凄惨さを物語っていた。

そして骸の丘に一人、血まみれの青年が傷一つない剣を支えに立っていた。

「そうだ…この夢を俺は知ってる…。」

徐々に俺が自我を意識するにつれて、その風景は遠ざかっていく。

ジリリリ!!ジリリリ!!

「うわっ!!!!!!!!」

驚いた青年がびくと体を震わせ、ベッドから起き上がり自分の部屋を後にする。

「うっ…おはよう母さん」

「おはよう、急がないと始業式遅れるわよ?」

「始業式は九時までに登校すればいいんだし大丈夫だよ」

そう言つて青年が時計へと視線を移すと時計の針は八時半を指差していた

「あれ???」

「あれじゃないわ。早く学校行きなさい。始業式早々遅刻だなんて恥ずかしくて仕方ないわ」

「そうだな…それじゃ行つてくるよ!!」

言つたり青年は勢いよく家を飛び出した。

俺の名前はテツペイ。

水城テツペイだ。

この春から学園ヴァレイの二回生になる至つて普通の学生だ。俺の住む都市エルリアは高度な科学が発展した世界有数の科学都市なんだ。

「ちよつ…ちよつとそこのエアキャブ待て待て!!」

エアキャブって言うのは空飛ぶバスみたいなやつだ。移動手段には欠かせない乗り物だ。

「ふーっ…ほんとに遅れるかと思つた…」

「また飛び込み乗車かぁ。二回生になつても相変わらずだねテツペイ。」

「おお、ケイゴ!!おはよう!!」

嘲笑気味に俺に話しかけた少し背の小さい青年。俺の友達、多路ケイゴだ。

「今日は始業式だけじゃなくて、クラス分けもあるから楽しみだよ  
ね。」

「そうだったな！いやあ…一回生の振り分け試験を思い出すな…」

「最下クラスのクラスFのままか、それともクラスEか、楽しみだね。」

「そうだな。おっ、そろそろ着くぞ。」

エアキャブがヴァレイの入口に近づくと勢いよく二人は飛び降りた。

「よつと！…相変わらず慣れないよなこの降り方。」「それより早く行こう。ほらあそこ！人が集まってるよ！！新しいクラス表だよ。」

そう言うなりクラス表に群がる生徒たちを押し退け二人は前へと身  
を乗り出す。

「えーと…Fには…ない!？」

「おお！…やったね、Dに昇格だね!！」

「いや…ちょっと待て、Dにもいないけど俺たち…」

「ええ!?!なんで!?!まさか留年…?！」

「そ…そんな訳ないだろ。ちゃんと証書だつて届いてるし…」

クラス表を見直すが俺とケイゴの名前はない。念のため全てのクラ

スの座席表を慎重に見ると、なんとか俺とケイゴの名前が書いてあった。

「おいおいケイゴ、よく見てみる。俺たちの名前ならここに書いてあるって。」

俺が安堵の息を漏らすとその傍らでケイゴが不意をつかれたように目を疑わせていた。

「テツペイ…テツペイこそよく見てみなよこのクラス…」

そついやクラスを見るのを忘れていた。自分の座席表からクラス一覧へ目をやるとそこには…

「クラス…S…?」

クラスS…それは生徒たちの間で存在すら確かではないと言われている幻のクラスだ。教室すら知られずそのクラスに割り振られた生徒の姿を見ることが叶わない。都市伝説のようなクラスである。

「ほんとに実在してたのか…クラスS。てか教室は!?!どこ行きやいいんだよ!?!そもそも俺クラスSに行くような成績じゃねーよ!?!」

「噂だけどクラスSって成績とか関係ないらしいって聞いたことがあるよ。」

「ますますわからねえ…はあ、とりあえず体育館で始業式始まるから行こうぜ。」

とほとほと二人は体育館へ向かった。その後始業式は通常どおり執り行われ、終わりとともに生徒は新しいクラスへと向かっていった。

「おいおい…どうすりゃいいんだよ…」

「困ったね…」

二人が途方に暮れながら体育館に残っているといきなり体育館の入口のドアが閉まった。

バタンツ！！

「!?!?…誰だ!?!?…?…誰もいないのか?」

恐る恐る入口へ近づくと床から白いガスが噴き出してきた。

「うわっ…!!!…なんだこれ…意識が…とお…く」

「テツペイ!!…しっかり…!!…うう…俺も…」

床に臥せる二人。

突如襲い掛かる罠。

彼らの日常は少しずつ歪んでいく。誰にも気づかれることなく。不思議な運命に手繰り寄せられながら。

## prologue?

薄暗い部屋。無骨な造りの椅子に持たれる男二人が重々しげに話をしている。

「首尾はどうだ？」

「はい…滞りなく。先程校内にいる最後のエレメンツ保持者たちを確保しました。」

「そうか。ご苦労だったな。そのエレメンツ保持者のデータをまとめた資料を取ってくれないか？」

「はい。こちらですね。」

片方の若い男がもう片方の年配の男に資料を渡した。

「ふむ…水城テツペイ、多路ケイゴか…全く、エレメンツの素養がなかったら落ちこぼれもいとこだな。」

年配の男がっかりしたようにそう言っていると申し訳なさそうに若い男が答えた。

「はい、今回はエレメンツ保持者自体の数も少ないですから。やはり無理があったのかもしれない…」

「仕方ない。無いものを悔いてもどうしようもないな。ではこの二人が目覚め次第“ホームルーム”を始めろ」

「了解しました。我が主よ。」

若い男が頭を下げ部屋を出ていく。  
そして部屋に残された男は深く溜め息をついてから呟いた。

「あれから一年、か。長かったのか短かったのか。お前はどっ思っ  
？エルリア…」

「あれ…？ここは？」

テッペイが目覚めるところが先程の体育館ではなく見覚えの無い大  
広間だと気づいた。

「おお！…やっと起きたか！…おいケイゴ！…テッペイがやっと起  
きたぞ！…」

雑に制服を着る派手な男がやかましくケイゴに叫んだ。

「お前は…コウヘイか？」

「おいおいなんだよ？頭、大丈夫か？しっかりしろよ」

ぼんと頭を叩く男。コイツは日ノ岡コウヘイ。俺が所属している部活のチームメイトだ。俺と同じレベルの馬鹿だが誰よりも熱い男だと俺は思っている。

「ああ、なんとかな。ったくそれよりなんだよさっきのは！！だいたいここはどこなんだ？」

「いや、それがわかんねえんだよ。俺もさっきここで目を覚ましたばっかだからな！！」

「ん？コウヘイ、お前もあの変な煙りで眠らされたのか？」

「変な煙り？何のことだ？俺、ちょっと早く学校来ちまってな、屋上で寝てたんだよ。それで目覚めたらここにいたわけだ。」

「そうだったのか。てかお前じゃあ始業式はどうしたんだ？」

「始業式…？ああ、そんなのもあったな。俺そういう面倒なの疲れるし出るつもりなかったのにな。」

「いや…始業式はもう終わってるから…」

「そうなのか？だいたい今何時なんだ？ここ時計もないし窓もないから時間が全然わかんねえ」そういえばこの部屋は何か変だ。第一扉がない。一体俺達はどうかやってここに集められたんだろうか？窓もないし、何というか…外からの何かを隠すような、嫌な感じがする。

「俺が目を覚ましてからもう1時間は過ぎてる気がするな。なあケ

「イゴー!!」

「そうだね。いい加減うんざりしてきたよ。」

そういつて不満をこぼしていると大広間の壁が開かれ扉のように通路が開かれた。

ゴゴゴゴゴ...

「うわっ!!なんか開いた!!」

「ほんとだ...でもなんか、怖いよね」

「うーん...でもまあ進むしかないだろ。ここにずっといるのも飽きたとこだしな」

彼らが大広間から通路へ抜けると大広間への扉が閉じた。

「戻れないってことか...まあ進むしかないわけだしいいさ、行くぞ」

歩みを進めているとコウヘイが何かに気がついたかのように叫んだ。

「あれって出口じゃないのか!!?」

三人が目を凝らすとたしかに通路の先に光が射していた。

「外だ!! やつと出られるね!!」

「ああ、さあ早く急ぐぞ!!」

三人は駆ける。やつと見えた出口を目指して。そしてついに出口を抜けたのだった。

「うわっ…眩しい」

「よく見えねえなこりゃ」

目が眩しさに慣れてくると三人は違和感を覚えてた。

「ん?ここって…」

「教室なのか…?」

するとその教室らしき部屋の奥に何人か人がいるのが見えた。

「おーい!遅いよー!!早くしないとホームルーム始まっちゃうよ?」

学生服を着た明るい女子生徒が三人を呼んだ。

「えーと…どういふこと？」

三人が途方に暮れていると冷やかな鋭い声が教室らしき部屋に響いた。

「ようやく揃ったようだな。これより、クラスSのホームルームを始める」

## prologue?

「な…何なんだよお前」

テッペイは突如現れた男にどこか違和感を覚えた。

(こいつ…何か違う。何か人間と違う…)

「ほう、不確かながらも私のエレメンツを感じ取るとはな。どうやらただの落ちこぼれではないようだ。」

「何をつ！??？」

「まあいい、お前の感じた“それ”についてもおいおい説明する。それよりまずはホームルームを始めんことにはな。まあ座れ」

男はそう言つと教室に相応しくない上質だと思われる椅子に腰を掛け話を進めた。

「ようこそクラスSへ。私が君たちの担任の桐生アキオだ。これから卒業までよろしく頼む。」

桐生からの挨拶が済むとさきほどの明るい女子生徒が不思議そうに尋ねた。

「あのー桐生先生？私たち二回生ですよ？卒業までってのはどうい  
う…」

すると待っていたかのように桐生は冷ややかに微笑み生徒の問いに答えた。

「ああ、君たちは卒業までの間はずっとクラスSだからね。ちなみに君たちクラスSは今日を以てここで衣食住を行ってもらうから。」

「はああああ！？？なんだそれ！？聞いてねえよ！！！」

コウヘイの激怒につれて他の生徒たちも怒りをぶつけた。

「だいたいこんな教室で何が出来るんだ！！！」

「そうよ！！いきなりこんなところに連れて来られて、早く家に帰りたいたい！！！」

混乱する生徒たちに桐生が淡々と説明を続ける。

「安心しろ。クラスS専用の学生寮もあれば食堂、風呂、図書館など衣食住には困らないよう設備を用意してある。無論既に君たちの親御さんにも連絡はしてあるから安心したまえ。だからここでの生活について心配する必要はない。」

ドヤツと無神経そうに桐生が喋り終わるととうとう我慢の限界を迎えたコウヘイが桐生へ進み出た。

「はあ！？何なんだよお前は！？俺は俺の自由にやらせてもらっただからさっさとここから出せ！！！」

コウヘイは桐生への嫌悪感を剥き出しにして睨めつける。

「?…私はお前たちの担任だが?」

「いやそうじゃねえよ!!!つつかぶざけんのも大概にしるよなっ!」

そういうなりコウヘイが桐生の胸倉をつかみ掛かった。しかし胸倉をつかんでいたはずのコウヘイの身体がすうっと宙を舞い身体が逆さまなつて頭から廊下へ激突した。

「!!!!!!?」

コウヘイは勿論、周りの生徒にも何が起こったのか訳がわからなかった。

「全く、動物だなお前は。嫌なら暴力で解決しようなんて考えはここでは通用しない、それを忘れるな。」

「ち…畜生ッ…」

コウヘイが気を失うなり、何を考えているかわからない無表情で桐生は話を戻した。

「他に質問のある者は?」

しかし先程の光景を目の当たりにした生徒たちは静まりかえり、誰ひとり手を挙げようなどというものはいなかった。

「いないか、なら次の説明に移るぞ。1番大事な話だ…」

生徒たちの緊張は更に高まり、中には桐生の異様さに恐怖して泣きそうになっている者もいた。

「このクラスのことについて。そして、君たちがここですべきことについての二つだ。まず一つ目、このクラスは今まで君たちが過ごしてきた学園生活とは掛け離れたクラスであるということ。今までのような学園生活はもう送れないだろう。悪いが君たちに選択肢はない。」

するとテツペイがやたら遠回しな言い方をする桐生に質問を投げた。

「一体…どの辺が掛け離れているんだ？」

すると桐生は一言。

「君たちはこの学園生活で命を落とすかもしれない」

「！……！？！？」

一瞬で部屋の中に戦慄が走った。

「命って…どっしりどっしりだよ…？」

動揺を隠しきれないテツペイは焦点が合わず、足をわなつかせ蒼白に顔色を染めた。

「だから死ぬかもしれないと言っただ。突拍子もない話だがなあに心配する必要はない。命に終わりがくるのは必定、当然のことだ。」

桐生の発言にテツペイを含む生徒全員が恐怖で凍りついた。

「し…死ぬ？そんないきなり死ぬだなんて…お前頭おかしいって…！！絶対おかしいって！！」

「嫌だ！！！！ここから出して！！！！出してよ！！！！」

生徒たちは完全にパニックに陥ってしまった。テツペイの隣にいたケイゴにいたっては恐怖のあまり嗚咽さえしている。

「ははははは！！！！いいリアクションだな。このクラスに割り振られた生徒はそういう反応をするがお前たちほど臆した反応をするやつらは初めてだ！！！！」  
急に態度を変え、上機嫌になった桐生は生徒たちを落ち着かせるために説明を付け加えた。

「死ぬと言っても万が一の場合に限る話だ。いや、億に一つと言ってもいいだろう。君たちが普段生活して事故に遭って死んでしまう、そんなレベルの確率だよ。」

そういうと生徒たちは幾らか穏やかになった。

「そ、そっかあ…なんだよ。驚かすなよな。」

「ま、このクラスSのホームルームのお約束みたいなもんだ。俺が担任になった以上そんなことはないよ。安心しろ。」

桐生が震えていたケイゴの頭をポンと優しく撫でながら Tepppei に向けて言う。

「お前たちがあまりに驚くもんでな。これ以上話を続けるのもなんだ、今は先にこの暮らしに慣れるのが先だな。残りの話は夕飯のときに話すでしょう。お前ら、まず部屋に戻れ。それから夕飯まで寮内の施設の位置の確認がてら好きに回ってくれ。とりあえず7時には食堂に戻るよう、解散!!」

態度の豹変した桐生が説明を終えると部屋の壁の四方が開き通路になった。

「それじゃあな。また食堂で。時間厳守だぞー」

手をヒラヒラと振りながら桐生が出て行った。

「……………はあ」

Tepppei は緊張が解けたのかずるーっと壁に寄り掛かり尻をついた。

「はあ…疲れた。ケイゴ大丈夫か？」

「うん…。桐生先生もいい人そうで安心したし。とりあえずコウヘイ連れて部屋に行こうよ。」

ケイゴが明るさを取り戻してコウヘイを指す。コウヘイはまだ気を失っているようだ。

「ああ、そうだな。いろいろ大変そうだけど、まあなんとかなるか。それじゃ部屋にいこうぜ。」

ズルズルとコウヘイを引きずりながら二人は部屋を抜け自室へ向かう。

こうして俺たちの人生最悪の学園生活の幕がゆっくりと開けてゆくのだった。

## prologue?

通路を歩き続けると俺達は寮の居住スペースにたどり着いた。

「ここに…住むのか？」

寮内とは言ったものの実際のところは寮全体が一つの街とっていいほどの大きさがあった。窓がないところを見ると恐らく科学都市の地下を使ってこの“寮”は造られているのだろう。それにしても寮内は広く居住スペースに来る途中、娯楽スペースの設備であろう野球グラウンドが見えた。

「ほんとに広いな…ここ。これをクラスS十数人で独占出来るって  
いつたい…」

そう言っていると俺とケイゴで引きずっていたコウヘイが目覚ま  
した。

「くそ！！よくもやってくれたな！！！！って…ここはどこだ？」

「やっと目を覚ましたなコウヘイ。ほいっと。」

手を離すとコウヘイは起き上がって、周りをキョロキョロ見回して  
いる。

「クラスSの学生寮だよ。ここはその居住スペース。なんかホテル  
みたいだね。」

確かに居住スペースはホテルのような造りをしていた。ロビーなど  
のシステムは完全自動で男子は一階、女子は三階に分けられていた。  
居住スペース自体は三階までしかなかったが一つ階の広さが尋常じ

やなかった。共有施設の食堂や談話室、大浴場など桐生の言ったとおり暮らしにはなに不自由のない、むしろ今までの生活が貧相だったと思えるほどに充実していた。

「うわー広いロビーだな。さてと、俺の部屋はと…101か。」

各々の部屋を確認するなり三人は部屋に向かった。居住スペースの構造を見るに個室に行くには一階の男子用談話室を通らないといけないらしく、三人が談話室に入ると他の男子生徒たちが荷物を置き終えたのか談話室でくつろいでいた。

「おーっす!!!これから卒業までよろしくな!!!」

テッペイたち三人に声をかけたのは顔立ちのはっきりした筋骨逞しい青年だった。

「おお、カイ!!!お前もこのクラスだったのか!!!」

清瀬カイ。一回生ながら野球部のエースの地位を獲得した大物ルーキー。その実力と素直な性格が相俟って一回生の人気者である。だから俺もカイとは面識がある。

「なんか最初はひびつたけど、楽しい学園生活になりそうだよな!!!あ、来る途中グラウンドあったじゃん!?皆で野球しようぜ!?!」

「ほんとに野球好きだなカイは。てかそれなら野球部はどうすんだよ!?!」

カイは野球が好きだ。それなのにこの生活を送ったら野球部にはいられないのではないか?テッペイが心配そうに尋ねると

「俺は、野球が出来ればそれでいいんだよ。それにさっき桐生に聞いたけど桐生が監督に話をつけてくれたみたいでな、チームの皆もクラスSに行ったことはクラス分けでわかってるだろうし、気にする必要はないよ。」

少し寂しそうにカイが話していると奥の部屋から体格の大きい見覚えのあるやつが出てきた。

「ここ個室も広いんだなーははは!!!お、お前もクラスSなのか!!!よろしくな!!!」

「ユウトか!!!お前相変わらずでかいな!!!これからよろしくな!!!」

扇谷ユウト。一回生の頃Bクラスにいた俺の友達。あっけらかんとしている裏表のない性格。見た目どおりの大食漢。エロ大魔神。

「後で娯楽スペース行ってみようぜ。AVコーナーあるぜきつと!!!」

「お前も相変わらずなことだ...」

テッペイがちょっと引いていると残りの生徒たちが出てきた。すると7時のチャイムが鳴り始めた。

「え!?もう7時なのか!!!」

そういえば、目を覚ましてから時間がわからなかった。窓もないの

で完全に時間がわからなくなっていた。男子生徒たちが二階の食堂へ急ぐ中、テツペイたち三人は個室に荷物を置きに行った。

「ハア…ハア…!!!」

三人が食堂へ急ぐと食堂の方から賑やかな声が聴こえた。

「テツペイ!!! 始まつてるよ!!!」

「あーもう!!! コウヘイ!!! お前が気絶なんてしてるから!!!」

「それを言うならあの桐生っていけ好かないすました先公のせいだ!!!」

文句を呟きながら食堂の入口に手をかけるとコウヘイが力を入れる前に思い切り扉が開かれた。

「へ?」

バシーン!!!!!!

思い切り開かれた扉は開かれた反対側にいたコウヘイの顔面を強く打ちつけた。

「ふえ…」

バタツ

コウヘイが倒れると扉から酒臭い空気が流れてきた。

「おお？なんだおせえぞ〜お前ら」

「桐生ツ！！？」

先程コウヘイをぶん投げたときは別人のような桐生がテツペイとケイゴを迎えた。

「コウヘイ！！おい！！コウヘイ！！お前まだ気い失ってるのかよ！！ガハハ！！」

その髭をこしらえた男がコウヘイの顔をぐにやぐにやにいじっていると二人はそーっと食堂の中に入っていった。

「おーい！！テツペイ、ケイゴ！！こっちだこっち！！」

カイが手を振りながら空いている席に二人を招く。

「悪い。遅くなった！！」

「いやいや構わねえよ。さつき始まったところだしな！！それより食べようぜ！！ここの料理美味いぞ、自動調理機とは思えない美味さだ。」

「へえ、確かに美味そうだな。よし！！食べるか、ケイゴ！！」

「おお、食べよう!!」

テッパイたちが食べはじめるとコウヘイを引きずりながら桐生が戻ってきた。

「あいつまた、引きずられてんのな……」

コウヘイを席に座らせ、桐生が席に着くと大声で叫んだ。

「よしお前ら!!!自己紹介から始めるぞ!!!まずは俺からだ!!!」  
自分で言っておきながら桐生は自分から自己紹介を始めた。

「クラスS担任桐生アキオ、28歳!!趣味は筋トレだ!!ガハハハハハ!!何か質問ある奴はいるか!？」

するとテンションが異様に高い女子生徒が桐生に質問をした。

「はあああいゝ先生!!先生は結婚していませんかあゝ?」  
顔の赤くなった女子生徒が桐生に尋ねた。きっと桐生がアルコール類を混ぜたのだろう。よく見ると生徒全員のテンションが異様に高くなっていた。

「おお?痛いところをつくな里枝!!婚約した相手がいたんだがな、ちよつといろいろあってな…ハハ」

桐生が申し訳なさそうな困った顔をした。

「先生もいろいろあったんだね…。ウチもさ、最近彼氏と別れちゃったんだ。だからさ先生！！新しい出会いしようよ！！ウチも応援してるから！！」

里枝が酔いながら桐生に抱きついて慰めた。

「里枝あ…お前はいいやつだなあ！！評価をAにしてやるぞ！！」

「先生！！！！」

(やれやれだな…)

「先生、次行きましょうよ…」

テッペイがやるせなさそうに言うと

「そうだった、そうだった！！次は里枝、お前の番！だ！」

桐生が自分に抱き着いてる里枝を引きはがすと椅子の前に立たせた。

「里枝マイです！！一回生の頃はクラスEでした。野球部のマネやってました。よろしくお願いします！！」

明るく挨拶を終え、里枝が座ると次々と生徒たちが自己紹介を始め最後にテッペイに出番が回ってきた。

「最後はテッペイだな。人付き合いは初めが肝心だぞ？」

「…初対面で無愛想かつ生徒ぶつ飛ばすやつに言われたくないけどな。」

そうぼやきながらテッペイが椅子から立ち上がった。

「水城テッペイです。一回世のころはクラスFでした。サッカーやってます。よろしくお願いします。」テッペイの淡泊な挨拶が終わると桐生が再び仕切りはじめた。

「よし！！全員の自己紹介が終わったな！！次はさつき途中まで説明したクラスSについて説明するぞ！！先生的には説明が面倒なのでこの映像を見てクラスSのなんたるかを知れ！！」

そう言つて桐生がリモコンのスイッチを押すと食堂の明かりが消え、スクリーンが降りてきた。

「お前らちゃんと見てろよ！！」

そうしてクラスSの説明ついでの内容が編集された映像が流れた。映像は30分ほど続き、その内容の異常さに生徒たちは再び言葉を失った。どうやらクラスSは科学都市に突如発生した超常現象を観測し、それが及ぼす被害を防ぎ、あるときは戦闘に及ぶこともあるという話だ。桐生が言つてた死ぬ危険があるというのはこれについてのことだったのである。そして最後に告げられた事実、それがエレメンツについてだった。

「エレメンツについては道明寺から説明を受けた方がいいな。おい、道明寺頼む。」

桐生に指名された道明寺モトキという短髪に眼鏡といういかにも知

的さを思わせる生徒が立ち上がり説明を始めた。

「エレメンツ、強いて言うなら私たちの中に備わっている超能力の  
ようなものです。」

「ちよっ…超能力!？」

テツペイより先にコウヘイが驚いた。

「はい、そうですね。もちろん、人によってそれは様々ですが…。  
例えば物を動かせる能力だったり、空を飛べる能力だったりと様々  
なエレメンツが存在します。同じように、ここ科学都市エルリアに  
起こる超常現象も様々です。だから私たちは多様なエレメンツを以  
て柔軟にそれらの超常現象に対応するために集められたわけです。」

道明寺が説明を済ますとケイゴが質問を投げかけた。

「そのエレメンツってやつはどうすれば使えるようになるの?」

道明寺が応じる。

「それについては学習スペースで理論、養成スペースで実習をメイ  
ンに鍛錬していくことになりますね。」

道明寺が説明終わるとわかったようなわかっていないような顔で頷  
く生徒一同。その反応を見た道明寺が困ったのか頭をボリボリと搔  
いた。

「ま、まあ習うより慣れろってことですよ。明日から少しずつクラ  
スSの授業に慣れていきましょう。」

モトキがそう言った瞬間警告用のブザーが鳴り響いた。

ビーンッ！！ビーンッ！！

「なんだよいきなり！？」

食堂にいた生徒一同が動揺する中、桐生は余裕そうに一同に指示を告げた。

「どうやら、明日からって話は無しだな道明寺！！よし！！お前ら地上に出るぞ！！」

すると桐生の言葉に驚いたのかさつきまで落ち着き払っていた道明寺が声を張り上げた。

「正気ですか先生！？彼らは今日クラスSに編入したばかりなんですよ！？」

するとさつきまで酔っ払っていたはずの桐生の態度がホームルームのときのような態度に急変した。

「安心しろ。俺がいる限るこいつらには怪我はさえねえよ。それに先遣でレイやナツミたちが向かってるしな。道明寺、お前がここで過ごした一年をお前が信じてやらねえでどうする？」

すると道明寺が何かを決心したかのように目を閉じた。

「わかりました。それなら僕は自分のエレメンツの準備をしてきます。」

「おお。期待してるぞ。お前ら非常用エレベーターに乗り込め！！」

戸惑いながら生徒たちは食堂の隅にあるエレベーターに乗り込むと、聞き覚えのある警報アナウンスが流れた。

「ただいま気象庁から厳戒警報が発令されました。被害に備えて自宅、または最寄りのシェルター行きエレベーターに乗ってください。繰り返します…」

「この警報…近頃やたら流れると思ったたらそういうことだったのか。」

謎が解けたかのようにテツペイが頷いていると、エレベーターの速度が落ちて行く。いよいよクラスSが地上に出るのだ。

「お前ら、いいか？絶対俺から離れるなよ？ま、そう怖がる必要はねえよ。大袈裟な警報がなるのはあくまでも民間人を巻き込まないための措置だ。諜報部隊からの連絡だと危険度はFってところらしいしな！一回生の頃のお前らぐらいの代物だ。」

皮肉気に桐生が冗談を言ってみせるとテツペイはその冗談は桐生が自分たち生徒を落ち着かせるためのものだと言うことを悟り、より一層顔を強張らせた。そしてついに、エレベーターが地上に到着すると、ゆっくりとエレベーターの扉が開いてゆく。

こうして今夜の一件は俺たちクラスSにとって一生忘れられないものになるのだった。

## prologue?

エレベーターの扉が開くと信じられない光景が俺達の目の前に現れた。

「な…なんだよ。これ…?」

車や建物の鉄骨が宙を舞い、すでに到着していたクラスSの生徒に襲い掛かっている。

「おい!!!レイ!!!大丈夫か!??」

桐生が叫ぶとその青年が振り向く。

「あ!!!お兄ち…じゃなくて桐生先生!!!」

「バカ野郎!!!こつち見るな!!!後ろ!!!」

レイと呼ばれた青年が再び鉄骨の方を振り向くと既に鉄骨が青年の眼前に迫っていた。

「危ねえ!!!!!!」

思わずテツペイが叫ぶ。

すると青年の黒い手袋のような武装が青白く輝き、間髪入れず振り返りながら鉄骨に裏拳を放った。

「はあっ!!!!!!」

ドガアアッ!!!

すると太い鉄骨がいとも容易く崩れ落ちてしまった。

「ふーっ…びつくりしたなあ…もう。」

青年は冷や汗をかいたのか額の汗を拭う。

「戦闘中に声掛けるなんて俺を見て死ねって言うてるようなもんだって先生!!そんなこと言われなくても僕はお兄ちゃ…じゃなくて先生のことなら穴があくほどよく見て…ってあれ?その人達は?」

呆れたように桐生がうなだれる。

「たしかに俺も悪いが、そのいらんとこまで喋る口はなんとかならねえのか…?」

「ハハハ!!それは無理な相談だよ先生。なぜって?だってそれは本心なのだから!!」

緊急時に緊張感のないやり取りをする二人を見て生徒たちが沈黙する。

「あ…あー、お前ら、この変な奴が一回生からクラスSでお前らのクラスメイトになる…」

「神崎レイだよ!!よろしく!!」

どよめきながらそれぞれ返事を返す。

「レイ、こいつらが今日からクラスSに編入した新規クラスSメンバーだ。」

「なるほどね！ああ、そういえば今日は始業式だったね！寮の中だと感覚狂うんだよね。うん。」

「まあ、それはいいとしてナツミとリカコはどうした？」

「ん？あの二人ならある程度状況把握させてモトキのところに向かわせたよ？だからそろそろ…お、きたきた。」

神埼がそう言うなりクラスS全員に先程エレメンツについて説明をした道明寺の声が聞こえてきた。

「…リンク完了。これより、クラスバー・オープン・ブレイク掌握せし全能の知を発動する！！！」

頭に響いた道明寺の声を聴くなり頭の中に見覚えのない映像が流れ込んできた。

「なんだこれ！？俺、こんな場所知らないぞ！？」

すると今度はここにいないはずの道明寺の声が頭に流れ込んでくる。

「他者の意識と意識を繋ぎ、さらにその仲介となる私の意識を他者に共有させる。これが私のエレメンツ、掌握せし全能の知です。」  
するとコウヘイが口を閉じ目をつむって何かを念じ始めた。

「おおすげえ！！！！喋らなくてもケイゴと話が出る！！！」

「ほんとだ！！そんなに顔痛いのか？」

「お前ら…」

テツペイが呆れていると、道明寺の指示が頭に流れ込んできた。

「皆さん！！その場所から北東300m先に強いエレメンツ反応を感じます！！気をつけてください！！」

「わかった！！道明寺！！それとナツミ！！リカコ！！聞こえてるか！？お前らはこっちに戻ってきてクラスSの生徒たちの保護を担当してほしい！！」

桐生が掌握せし全能の知を介してナツミとリカコという名の生徒に指示を送る。

「わかりました先生！！」

「いまそっち向かいまーす！！」

するとリンクが切れたのか二人の声が聞こえなくなった。

「道明寺、お前も無理するな。お前のそれは脳に負担がかかる力だろ？一度にこの人数をリンクするのは相当きついはずだ。俺が指示する以外は俺とレイ、ナツミ、リカコの四人のリンクのみでかまわん。掌握せし全能の知で俺らが目的地に着いたのを確認したら四人にリンクし直してくれ。」

「はい…助かります。それでは一旦リンクを切るんで、後でまた…」

「  
すると流れ込んできた道明寺の意識が消えた。」

「さあ、俺達は目的地へ向かうぞ！何かあればすぐ俺に言え！！」  
桐生を先頭にクラスSが歩きだす。無惨に潰れた車の残骸をよけながら慎重に進んでいると後方からさっきの女子生徒二人が追いついてきた。

「やっときたか。遅かったぞ。」

「リカコがこんなときに漏れるとか言い出すんでトイレに寄ったんですよー！！」

「違う違うー！！なっちゃんかトイレ行った方がよくない？って言うから申し訳なくて出もしないのにトイレ寄ったのー！！」

「あーもうどっちでもいいから。ナツミ早く防御膜を張ってくれ。」

「はいはいー。石人形の守護ゴレム・プロテクションいくよー！！」

ナツミが手をかざすとつつすらとオレンジがかったドーム状の膜が生徒たちを覆った。

「なんだこの膜？あれ？通り抜けるぞ？」

「その膜は内側からは効力を発揮しないけど外側からの物理的干渉を遮断するの。」

桐生はナツミが説明を終えると今度はリカコに指示を出した。

「リカコ、もしものときのためにアレをすぐ出せるようにしておいてくれ。」

「了解」

すると生徒たちの一歩先を歩いていた神埼が何かの異変を察知した。

「先生、多分この先に何かいる!!」

「よし!!レイ、リカコ、ナツミ戦闘配置に着け!!換装したのち道明寺の指示を受けるまで待機だ。」

桐生が手を挙げると三人は前方に走り出し、何かをつぶやくと制服姿から一瞬にして戦闘用の服に変身し、手元が光るや否や、それぞれの武器が現れた。

「うおおお!!!かけえええ!!!」

それを見ていたコウヘイが興奮のあまり叫ぶ。神埼は相変わらず黒い手袋のような物をつけたままだったが。リカコの手握られた二本の短剣、ナツミの手足を覆う籠手が、脛当てがこれから始まるであろう壮絶な戦いを予感させ、生徒たちに不安がよぎる。すると桐生たち四人が道明寺からのリンクを傍受し、連絡を受ける。

「そのこの十字路を右に曲がった先にある大通りで強力なエレメンツの反応を確認!!幻影イルシオンです!!」

「わかった!!!よし作戦開始だ!!!行け!!!」

「了解!!!!!!」

桐生の指示を受けて、三人が大通りへ向かう。

「三人からの連絡が来たら俺達も動くぞ。準備してろ。」

「……………はい。」

生徒たちが大通りの方をじっと見守る。

一方、大通りに向かった神埼たちは先程の鉄骨や車とは比べものにならない幻影に息を呑んでいた。

「これは…警備用のエリミネーターが幻影に憑依されたのか!?!」

三人が見上げた巨大なロボットはテロ対策に軍事が用意した物で、その大きさは軽く10mを越えていた。

「…これは久しぶりに苦戦するかも…ナツミ!!僕らにプロテクトを!!リカコはアレを頼む!!」

ナツミが先程 Teppai たちにかけての防御膜よりも濃い膜をレイの手足など局部に集中させ、かける。そしてリカコが精神を研ぎ澄ましゆっくりと閉じていた瞼を開く。

「未来女神の予知眼!!!」  
スクール・ウイジョンアイ

リカコがエレメンツを発動させると黒かったリカコの瞳が青々とその色を変えた。

「レイくん！！ナツちゃん！！左から、来る！！」

リカコがそう言った瞬間だった。エリミネーターの左手が銃器へと変形しところ構わずガトリングを乱射する。

ガガガガガガガガガ！！

「ちよっ…ちよっと！！危ないってば！！」

ナツミが建物の陰に隠れる。

「これじゃ攻撃が先読み出来ても近づけない！！レイくん！！どうするの！？」

同じく陰に姿を潜めたりカコが困惑する。

「困ったな…モトキ！！こいつの分析結果は！？？」

すると三人の頭の中に道明寺の意識が流れ込む。

「あのエリミネーターは敵と認識した熱原体を視認次第攻撃を開始する。奴の視界はほとんど人間と変わらないから背後から回り込んで後頭部にある強制停止のスイッチを押せば…なんとか！！」

「回り込むって言ってもなあ…この大通りじゃ隠れる場所もないし…」

レイが思考を巡らす。そして自分の出した答えに受け入れる。

「はあ…仕方ない、僕が囿になる。」

その際にナツミとリカコがあいつの後ろに回り込んで停止スイッチを押す、これでいこう!」

「何がこれでいこう、だよ!!何考えてんの!?死ぬかもしれないんだよ!？」

ナツミとリカコが激怒する。道明寺がリンクしているとはいえ、その大きな声がレイの頭にはとても響いた。

「い、痛いって!!声でかいて!!てかナツミたちのサポートも必要だから僕の生きるも死ぬのも二人にかかっているんだよ!?!だいたい僕が失敗したら次に狙われるのは二人だしどっちが先かってだけだって。」

すると納得したかのようにナツミたちの声が小さくなる。

「わかったよ。でも無茶はしないでね!!!危なくなったらすぐ隠れて!!!わかった!!!?」

またもや二人が大声で叫ぶ。

「わかった!!!わかったから!!!声でかいて!!!」

頭痛がしながらも自分を心配してくれるナツミとリカコに照れ臭さ

を覚え、レイが苦笑する。

「そうと決まったら絶対成功させなきゃな。」

照れ臭そうにレイが屈伸を始めていると屋根に赤い風船が引っ掛かっていた。それがどうにも照れている自分のように見えて一層恥ずかしくなった。まるでそれを誤魔化すかのようにレイが指示を出す。

「な…ナツミは僕に最大限の石人形の守護をかけながら、あいつの後ろへ回り込んでくれ。リカコはその場で待機しつつ未来女神の予知眼で僕たちをサポートを頼む。」

「わかった。絶対成功させよう!!!」

「うん!!!」

レイは屈伸を終えると何かを唱えはじめた。

「汝は風…脈動せし疾風の奇跡…」

するとレイの足が鉄骨を粉碎したときのように青白く輝き始めた。

「準備オーケーだよ。先に僕が出るからナツミはタイミングを見計らって出てきてくれ。」

大通りを挟んで向こう側の建物の陰に隠れているナツミに合図を出す。

「大丈夫。絶対やれる。」

レイの手が3、2、1と指を折り始め、ついにカウントがゼロになった。

「スタート!!!!!!!!!!」

レイが建物から姿を現し、瓦礫のかけらをエリミネーターにぶつけた。

「よし、かかった!!こつちだ!!!!」

エリミネーターが左手から先程のガトリングを打ち出す。

ガガガガガガガガガ!!!!

しかし打ち出された銃弾はレイを捕らえることが出来ない。

「この速さならいける!!!!」

そして全ての銃弾をかわすと、エリミネーターが弾を補充するため硬直した。

「ナツミ!!!!!!!!!!今だ!!!!!!!!!!」

今度はナツミが建物から姿を現し、後ろを向いているエリミネーターへと一直線に駆け抜ける。

「はあ!!!!!!!!!!はあ!!!!!!!!!!あと少し!!!!!!」

残り数mのところまでエリミネーターが再び動き始めた。

「ちっ……後少しのところ……！……！ナツミ……！そのまま走れ……！」

するとエリミネーターの全身の装甲が開き無数の銃口がレイを狙う。

「レイくん……！反応弾が来る……！逃げて……！」

リカコが未来女神の予知眼を発動させレイに告げた。

「だめだ……！ここで逃げたら、あいつの視界が動いてナツミがあいつの視界に入る……！」

バシュ……！バシュ……！バシュ……！バシュ……！バシュ……！  
……！バシュ……！……！バシュ……！……！

無数の反応弾がレイ目掛けて発射される。

「ナツミ……！石人形の守護を……！」

すると走りながらナツミがレイへと手をかざす。

「石人形の守護……最大……！」

防御膜を挟んで向こう側にいるレイが見えなくなるほどに濃く、厚いオレンジの壁をナツミが展開する。

「これなら……！いけるっ……！」

そして反応弾がオレンジの壁へと突き刺さり爆散する。

ドオオオオオン……！！……！！

凄まじい爆音とともに爆炎が巻き起こる。

「レイくん!!??レイくん!!!!!!」

ナツミたちが叫ぶと、先程と同じように苦笑の混じった声が頭の中に響く。

「だから…声がでかたって…」

すすまみれになりながらレイが建物の壁にもたれる。そして再びエリミネーターが弾の補充のために硬直した。

「よし…これでは…ナツミ、スイッチを…」

ナツミがエリミネーターの背に飛び移り後頭部へ手を伸ばす。

「え…!!?開かない!!ハッチが熱暴走で熔けて動かない!!!!」

「そんな…!!??リカコの未来女神の予知眼は!?!」

レイがリカコの方を振り向くと、リカコの目の色が再び黒く変わり始めていた。

「ごめんっ…!!!!私の目…もうっ…力が残ってな……」

力を使い続けたリカコが建物の陰から倒れ付してその姿があらわになった。

「リカコッ…!!!!」

するとエリミネーターがナツミに気づき首を反転させる。

「！！」

首を振り回し、回転したエリミネーターの首が防御膜をいとも容易く破り、ナツミの脇腹に直撃した。

ゴキッ！！！！！！

「ぐっっ…！！？」

吹き飛ばされたナツミが地面に叩きつけられる。

「ナツミ！！！！！！」

エリミネーターが狙いを倒れているナツミに変え、再び全身の装甲を開く。

「また反応弾か…！！！！こっとなつたら…！！！！！！」

レイが足に付与した力を解除し、エリミネーターに向かって手を力強くかざす。

「うっ…解放！！！！デイメーターズ…」

その時だった。建物の脇から小さな少女が姿を現した。

「なんでこんなところに…！！！？そうか…あのとときの風船…！！！！！！」  
先程の赤い風船がレイの脳裏をよぎる。

「だめだ！……僕のエレメンツがあの子を巻き込んでしまう……！」  
エレメンツの発動を無理矢理押さえ込み、再びレイは足に力を付与してナツミの元へ駆け付ける。

「くっ……！！間に合え……！！」

反応弾がナツミ目掛けて打ち出される。

バシユバシユバシユバシユバシユバシユバシユ……！！

「だめだ……！！間に合わない……！！ナツミ……！！……！！……！！」

レイが激昂し大声で叫ぶ。己の浅はかさと仲間を守れない弱さが一  
気に涙となって零れ落ちる。

しかしその刹那、レイの叫びを掻き消すかのように熱風が巻き起こ  
り、熱を増してゆくその風が全ての反応弾を溶かし尽くした。

レイは何が起こったのかと目をきょとんとさせた。

「俺の大事な教え子たちをずいぶん可愛がってくれたみたいだな。鉄屑風情が。」

「お兄ちゃ…ん…?」

「おいおい、先生って呼べって言うてるだろ?」

「はは…そうだった…」

ドサッ…

その聞き慣れた声に安堵したのかレイは膝について地面に倒れた。

「よく頑張ったなお前ら。後は俺に任せろ。」

すでに倒れている三人に聞こえるはずがないその言葉を、桐生が独り言のように呟き、エリミネーターに向かって歩き出す。

「全くよお…幻影たちはクラスSで処理するつつってんに軍のやつらが介入してきたと思っただらこのざまだ。」

またもや反応弾の充填を始めるエリミネーターに向かって桐生が手をかざす。

「させねえよ。」

たちまちゴウツと熱風が巻き起こるとエリミネーターの銃口が溶解

し、銃口が塞がれ、反応弾が内部で暴発した。

ドオオオオオン！！！！！！

一瞬にして桐生の言ったとおり“鉄屑”と化したエリミネーターを素通りし、倒れた三人を担ぐ。

「おい、お前らも見てないで肩かしてやれ。」

エレメンツの戦いを目の当たりにして呆然と立ち尽くしていた生徒たちが桐生の元に集まり倒れた三人に肩を貸して担ぐ。

「ったく…無茶しやがってお前らはよ…」

ポンと三人の頭を撫でると、すぐに救護班が駆け付け三人を運んでいった。テツペイが運ばれていった三人を複雑そうな面持ちで見送る。

「あんなにぼろぼろになって、死ぬかもしれないのに戦うのか…」

他の生徒が沈黙しているなか、テツペイが一人つぶやいた。

こうしてクラスSの編入初日が幕を閉じた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2540ba/>

---

Good bye days ~ それでも僕たちは生きていく ~

2012年1月6日15時52分発行